

サイネリア *Senecio × hybridus* (Willd.) Regel キク科

1 経営的特徴と導入方法

サイネリアは、冬から春にかけての代表的な鉢花として親しまれている。

従来サイネリアは、小中輪で単調な色彩のものが多く、面白味に欠けていたが、近年、大輪の色彩豊かな品種が市場に出回るようになり、人気が高まってきた。

表1 10a 当たり旬別所要労働時間 (単位: 時間)

月	1 月			2 月			3 月			4 月			5 月			6 月		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
時間	15.0	43.0	15.0	15.0	23.0	35.0	55.0	50.0	35.0									

7 月			8 月			9 月			10 月			11 月			12 月			合計
上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
						10.0	25.0	15.0	15.0	173	165	15.0	23.0	15.0	15.0	123	115	995.0

(注) 1. 山梨県農業経営指標 I (果樹・花き) (1999.3)

2. 出荷鉢数8,000鉢/10a 春出し (3月出荷)

2 生理生態的特性と適応性

サイネリアはカナリア諸島原産のキク科植物で、シネラリアとも呼ばれている。和名を富貴ギクといい、冬から春にかけての定番鉢物となっている。現在栽培されている系統の元となった品種はイギリスで育種されたものであるが、販売されている品種のほとんどは日本国内で育種されたものである。性質は暑さを嫌い、日本のような蒸し暑い夏は枯死する場合はほとんどである。そのため本来は宿根草であるが、取り扱い上は夏まきの1年草となっている。生育適温は10~16℃で、0℃で凍害、25℃以上で生育が阻害される。花芽分化は、短日条件下で行われるが、温度との関わりが深く、5~10℃、6週間の低温期間が必要とされている。高温では花芽分化が阻害されると言われているが、温度域については明らかではない。

3 作型と品種

作 型	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
10～11月出し栽培							○	—	◇	—	◎	—	Ω - 加温 - Ω
12～1月出し栽培		—	Ω						○	—	◇	—	◎ — 加温 —
2～4月出し栽培										○	—	◇	—
													◎ — 加温 —

(1) 作型

ア 10～11月出し栽培：6月下旬頃播種し、10～11月に出荷する作型。

イ 12～1月出し出荷栽培：7月下旬頃播種し、12～1月に出荷する作型。

ウ 2～4月だし栽培：9月上旬頃播種し、2～4月に出荷する作型。

(2) 品種

小輪から大輪、早生から晩生と品種は多岐に及ぶ

	早生系（年内）	中生系（1～3月）
小輪系 (2.5～3 cm)	ホイップシリーズ アーリーパーフェクション	
中・大輪系 (4～6 cm)	極早生鴻巣系	エキストラシリーズ スプリングハーモニー うらら メロディー プラネット カーニバル
巨大輪系 (8 cm 以上)	福だるま	

※早晩性は種苗メーカーのカタログによる



図1 中生大輪品種「カーニバルシリーズ」

4 栽培

(1) 育苗

ア 播種準備

播種用土は水保ち、水はけ共によいものを用いる。市販の用土でもかまわないが、自分で調整するときは土と有機質資材を等量に混合したものを用い、土壌消毒は必ず行う。pHは6.0程度でよいと考えられる。肥料に関しては、サイネリアは生育初期の養分吸収量がごく少ないため、無肥料で良い。プラグトレイを利用すると後の移植時に労力が軽減されるが、種子が非常に細かいため、播種機がない場合は箱播きが無難である。

イ 播種

播種準備のところでも述べたが、種子が1 ml で2,000~2,500粒と微細なため、箱播きにする。大きめの育苗箱（50×30×6 cm）では500粒前後薄く播種をする。かん水は、底面吸水で行うが水を溜めたままにしない（蒸れ防止のため）。

播種後は覆土をせず、発芽適温15~20℃を考慮して、遮光した涼しい場所で管理する。ただし暗黒にはしない。

ウ 発芽後の管理

発芽までの期間は1週間程度であるが、育苗期間は播種から1か月程度である。かん水は発芽までは乾かさないように行い、発芽が揃ったら、表土が乾きはじめたらかん水するようにする。多湿は蒸れにより立ち枯れ症状が出たり、徒長の原因となる。肥料については鉢上げまで特に必要なく、地力だけでまかな

えるが、無肥料の市販用土を用いたときなどは、極端に葉色が薄くならぬよう、適宜ごく薄い液肥を施す。

(2) 鉢上げ準備

ア 用土の準備

サイネリアは赤土や田土のような重い土を好む。これをベースに腐葉土などの有機質資材を等量近く混入する。物理性に心配があるときは、全体量の1割程度もみ殻くん炭等を混入する。このように調整した用土は播種時同様消毒を行う。

(3) 施肥

サイネリアは初期の養分吸収量が少なく、生育中盤から直線的に増加する。このため初期に肥料が多いのは好ましくなく、EC値で0.8mS/cmを超えると生育抑制が発生する。窒素レベルで見れば、必要量は1g程度であるが、全て基肥として混入するのではなく、基肥は3割程度に押さえ残りの7割は追肥で行いたい。また基肥は緩行性を用いる。

(4) 鉢上げ

ア 第1回目

播種後1か月もすると、本葉2～3となり移植の適期となる。2.5～3号のポリポットに鉢上げをする。

イ 第2回目

第1回目の鉢上げから1か月半もすると、ポットいっぱいに生育している。このころ5号鉢程度に仕上げの鉢上げをする。

(5) 鉢上げ後の管理

ア かん水

鉢上げが終わったら、鉢底から水が流れ出るまでたっぷりとかん水を行う。その後は用土表面が乾きはじめてからかん水する。どちらかといえばやや乾燥気味に管理する。

イ 光線管理

夏場の高温期には遮光を行い気温を下げる努力をするが、秋以降は十分太陽光線に当て、徒長のない、しまった草姿に仕上げる。

ウ 温度管理

夏場は、25℃以上にならぬよう換気や遮光を行い、なるべく涼しく管理をする。秋以降は生育適温10～16℃を目標に加温し、最低温度が5℃以下にならぬようにする。ただし花芽分化に5～10℃の低温に約6週間遭遇しなければならぬため、年末出荷は10月中旬以降、2～3月出荷では12月末～1月から出荷期に応じて10℃～13℃の加温を行う。

エ 追肥

葉色をみながら適宜液肥によって行う。薄目のものを回数でコントロールするようにする。鉢上げ用土の準備のところでも述べたが、必要とする窒素成分の7割、つまり0.7g分を複数回に分けて追肥をする。特に開花が近づく頃、多めに施肥されるようにする。

5 主要病害虫とその防除対策

(1) 病 害

ア 苗立枯病

幼苗の地際部が褐色に腐敗し、倒伏する。坪枯状に発生することもある。病原菌は*Rhizoctonia*属菌が記録されている。健全な用土を用い、は種床が過湿にならないように管理する。

イ 灰色かび病

葉、花梗、花弁に発生する。水浸状の変色した病斑ができ、後に灰色のかびを生じる。

発生の特徴と防除法は共通事項参照

ウ うどんこ病

葉に白色粉状の小斑点ができ、次第に葉全面が白い粉で覆われる。

発生の特徴と防除法は共通事項参照

(2) 虫 害

ワタアブラムシ、アザミウマ類、ハダニ類等が加害するが、他の害虫も含めて県内では不明な点が多い。

6 調製・出荷

出荷適期は市場により異なるが、中・大輪系のもので5～6輪程度が開花したときである。鉢の汚れを拭き取り、枯れ葉を取り除いてからの出荷となる。また葉の傷みを軽減させるため、出荷袋に入れて出荷する。

参考・引用文献

- 1) 浅野昭、「農業技術体系花卉編8 1・2年草」、農山漁村文化協会（平成6年）
- 2) 竹田幸正、卯柳重光、「鉢物栽培技術マニュアル 2巻」 誠文堂新光社（平成6年）

サイネリア栽培ごよみ

月	旬	10～11月出荷 (保温程度)		12～1月① 2～4月②		栽培の要点	摘要																																																																	
		生育	作業	生育	作業																																																																			
5	上					1. 作型																																																																		
	中																																																																							
	下																																																																							
6	上	播種				<table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <td></td> <td>5</td> <td>6</td> <td>7</td> <td>8</td> <td>9</td> <td>10</td> <td>11</td> <td>12</td> <td>1</td> <td>2</td> <td>3</td> <td>4</td> </tr> <tr> <td>10～11月</td> <td colspan="12" style="text-align: center;">Ω加温Ω</td> </tr> <tr> <td>出荷</td> <td colspan="12" style="text-align: center;">○—◇—◇—□</td> </tr> <tr> <td>12～4月</td> <td colspan="12" style="text-align: center;">Ω—加温—Ω</td> </tr> <tr> <td>出荷</td> <td colspan="12" style="text-align: center;">○—○◇—◇—□</td> </tr> </table> <p>(注) ○：播種、◇：鉢上げ、□：出荷</p>		5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	10～11月	Ω加温Ω												出荷	○—◇—◇—□												12～4月	Ω—加温—Ω												出荷	○—○◇—◇—□												
							5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4																																																						
	10～11月						Ω加温Ω																																																																	
出荷	○—◇—◇—□																																																																							
12～4月	Ω—加温—Ω																																																																							
出荷	○—○◇—◇—□																																																																							
中																																																																								
下																																																																								
7	上	発芽		播種①		2. 播種																																																																		
	中																																																																							
	下																																																																							
8	上	鉢上げ		播種②		(1) 温度：発芽までは15～20℃前後とする。25℃以上になる時期の播種は避ける。																																																																		
	中																																																																							
	下																																																																							
9	上	生育	仕上げ	鉢上げ①		3. 用土の準備																																																																		
	中																																																																							
	下																																																																							
10	上	生育	出荷始め	鉢上げ②	仕上げ①	(1) 長期間にわたり物理性が変化することのない用土を用いる。 団粒化された土壌をベースにする。比率は土壌5割、腐葉土5割、さらに全体量の1～2割十和田砂やもみがらくんたんを混入。																																																																		
	中																																																																							
	下																																																																							
11	上	開花期		仕上げ②		(2) 生育初期の吸肥力は弱いため無肥料とする。pHは5.5～6.0を目標に矯正する。																																																																		
	中																																																																							
	下																																																																							
12	上	出荷①				4. 鉢上げ																																																																		
	中																																																																							
	下																																																																							
1	上	出荷②				5. 定植後の管理																																																																		
	中																																																																							
	下																																																																							
2	上					(1) 温度：10～11月出荷では保温程度でも栽培可能である。12月以降の出荷の作型では最低5℃以上を保つように加温する。花芽分化までは10℃以上にしない。その後は生育に応じて10～13℃に加温をする。																																																																		
	中																																																																							
	下																																																																							
3	上					(2) かん水：用土表面が乾き始めたら、鉢底から水が出るまでたっぷりとかん水をする。																																																																		
	中																																																																							
	下																																																																							
4	上					(3) 追肥：葉色が淡くなってきたら追肥をする。追肥はごく薄い液肥を用い、回数でコントロールする。開花が近づいたら多めに施用する。																																																																		
	中																																																																							
	下																																																																							
5	上	6. 出荷				市場にもよるが、5～6輪前後開花したときが出荷適期となる。 枯れ葉や傷んだ花等を取り除き、鉢の汚れを落として出荷する。葉の傷みを軽減するため出荷袋に入れて出荷する。																																																																		
	中																																																																							
	下																																																																							